

(右は莊嚴講衆より惣長吏に與へたる返簡なり。)

【白山宮莊嚴講中記録】

一〇七

貫首下知云。去十一日衆札具以披見、此條先日締之次第令申候了。抑昌澄雖不及成敗、以衆儀有其沙汰云々。然間可被任惣評定之由申下之處、依不衆儀落居、式日有限勤行既及闕如云々。尤驚承野候也。所詮爲衆儀一端、爲宥被結衆及沙汰候歟。爰不存知今度衆儀、無左右雖難成敗、早於當年者、優去年衆儀可被閣之。至向後者如先例、入衆不足之時、被擧達若屬最末仁等之條、更不可違故實之者也。此上者行被閣之勤行、當月中可被遂行候也。恐々謹言。

(文永七年) 八月十七日

權律師、

(本文は八月十一日堂僧の進狀に對する貫首側の指令なり。)

【白山宮莊嚴講中記録】

一〇八

自堂僧中被申候、於莊嚴講可被止新儀擧達之由事等、濫訴之企難存知子細候。擧狀已下事、前代既被定置候後經年序候上者、非新儀候哉。就中近年之程、結衆及五人退出候之間、講問毎月難取續候。仍撰器量之仁令擧入事候。然者此講演法味異余、嚴重無雙事候之間、猶以可申請忠賞之由相存候之處、剩可改先事之旨被訴申候之條、理致不可然候。仍條々事可仰。上裁之由相存候。但堂中勤并此講説入衆不足事者、同心令數事候。更不存異執候者也。野詮者、且任道理且任先例、無改御沙汰候上者、爲所爲人尤可宜候哉之由可令陳申給候。恐々謹言。

(文永七年) 八月廿五日

莊嚴講衆等

謹上 大進公御房

(右は莊嚴講衆より貫首側に對する返狀なるが、その先に貫首の與へたるものは傳はらず。因に貫首とは惣長吏・院主・大勸進・大先達をいへり。)

文永十年

癸酉

紀元一九三三

十一月十四日。幕府、近江日吉社領羽咋郡堀松莊預所定盛と地頭淨信との爭論を裁決す。

【又續寶簡集】

一〇九

日吉社領能登國堀松庄雜掌法橋定盛、與地頭又二郎入道淨信相論條々

(前略)

一、地頭押取預所下人藤太郎男船事。
右定盛、則淨信或押取件船、或凌藤太郎男之由申之。淨信亦彼岸日企漁、引上船之旨陳之者。漁事定盛論申之上、縱彼岸齋日中雖企漁、爲地頭之身、無左右令押取預所船之條、爲狼藉之間、所被互鎌倉中橋一所也焉。以前條々、依鎌倉殿仰下知如件。

文永十年十一月十四日

武藏守平朝臣 在判
相模守平朝臣 在判

文永十一年

甲戌

紀元一九三四

十一月廿一日。領家日野資宣、珠洲郡若山莊に

命じて、舊に依り檜原神宮寺馬上免三段等を僧守清に領掌せしむ。

【法住寺文書】 珠洲郡

一一〇

袖判

下 若山庄

可早如元守清法師進退領掌檜原神宮寺馬上免三段并住宅以下事

右件馬上免以下、如元可進退領掌。但向後寺役以下若有懈怠、可被召上之狀、所仰如件。

文永十一年十一月廿一日

(本文書は當寺目錄に、左衛門康言馬上免之事文永十一年判之物一通とあるに相當す。)

建治元年

乙亥

紀元一九三五

九月九日。羽咋郡大福寺六所明神の御正體成る。

【大福寺六所明神御正體裏書】 羽咋郡

一一一

建治元年九月九日